

十名直喜

『学びと生き方のリフォーム——AI時代の人間・労働・経営』

社会評論社 2024年6月 2400円+税

平松 民平

I 「はしがき」が語る本書の概要

本書は、元祖の情報論・洞察・警鐘に学び、現代的な視点から捉え直す。第1部では、人間・労働・経営について、AI論を起点に体験・倫理・企業社会など多様な視点から考察する。第1部を「AI・倫理」編とみれば、第2部は「生活・学び」編にあたる。第2部は、生活・住まい・学びについて、自らの実践と検証をふまえてわかりやすく深く説いた貝原益軒「養生訓」に啓発されたことである。それはAIへの問いに応える道に通じる。本書は、働きつつ学び研究する半世紀余の実践と思索を通して、紡ぎ出したものである。創造的な学び、生き方の哲学とノウハウを汲み取っていただきたく思う。

II 評者が理解する本書の内容

本書は社会変革への創造的探求者／実践者としての著者の「学びと生き方の人生」を総点検してまとめ上げた集大成である。そしてその総点検が、急発展しつつあるAIの広く深い理解に裏打ちされてなされている。これは従来の伝統的な社会変革の運動にはなかった「情報」への本格的な切り込みであり、本書の特徴である。著者はAIの専門家ではないにも関わらず、本書1部のAI論はそれ自体がまとまった論考として示唆に富む内容を持っている。本書の主題は学びと生き方のリフォームでありAIはそのための必要最小限の言及でも済むかもしれないが、著者の徹底した探求心は、前提としての学びを超えた独自の本格的

AI論になっている。

著者は基礎研の理念「人間発達と現場主義（現実と理論の結合）」づくりにも関わった「学びと生き方」の長年の実践者である。研究のバックボーンとしての人間発達論、研究の姿勢としての現場主義、足が地に付いた等身大の実践、が「学びと生き方」のリフォームの柱である。リフォームとはすでに存在し機能しているモノ、コト、活動を更新された現実に応じて新たな枠組みの中で再構成する第二の創造である。

- ・人間発達は、資本主義の生産力発展と一体となって、労働を媒介として推進され、資本主義を変革する主体をつくり上げる。しかしAIの発展が急激で、人間発達の媒介としての人間労働自体を不要にする勢いがあり、人間発達論の見直しを求められている。それに応えるために情報論の源流にまで立ち戻ってのAIの深い考察がなされている。
- ・現場主義は、理論によって現実の理解を深め、現実によって理論を点検／修正する、現実が現場にあるとして理論と現実の相互作用を重視する科学的態度である。ここでの前提は現実をどれだけ正しく全面的に認識できるかである。例えば副題「人間・労働・経営」であるが、マルクス主義にルーツを持つ改革派（評者は著者をそう理解している）は経営に言及されることは少ない。現実の人間・労働の理解と改革には経営が重要な要素であるとの認識であるが、これは現場主義の徹底から生まれた十名経営哲学の理論である。著者の探求心が向かう先は常に変化発展のさ中にある現実であり、AIはその象徴である。

・等身大の実践は、働学研の設立と運営で、著者自らが自らの活動の舞台として用意したものである。知の社会的資源を集中させ、社会人研究者を育成し、あらたな知の資源として社会に送出するハブ的な循環ポンプが働学研である。働学研はこれまでの著者の経験と自身の高齢化による蓄積的知力へのシフトに適合的な創造的実践でもある。これもまた現場主義から生まれている。

Ⅲ 評者が触発された論点

1部では、AIによる社会の変容を広くかつ根源的に捉えるために情報理論の古典から最新の発展状況、日本における経営哲学との接点にまで当たって考察している。

- ① コトバが人を地球の覇者とした。コトバは多くの思考を集積し結合する道具であり、共同作業の道具として人類に与えられた進化の到達点。だが今日ではコトバの最先端で人を支配する疎遠な力としてAIが人類絶滅の脅威に反転しつつある。この反転の元凶は何か、知が資本ファーストで利用されることか、あるいは私有化された資本は労働を組織する道具としては役割を過ぎつつあるのか。
- ② ウィナーは情報は秩序化であると言う。混沌へ、無秩序へ向かう自然を、秩序化し、ベクトル化するのが情報の機能で、生産物の有用性の根源。これは自然への反逆、生命が自己を維持するのも自然への反逆であり、人は自然の中にあるけれど自然へ反逆する、混沌の秩序化が生命と創造の本質であろう。
- ③ AIはネット情報を取り込んだものまねに過ぎない、と言われているけれど、それは殆ど人間と同じということでもある。地中から掘り出したものでない資源（情報）が今日の使用価値の大半を占めるに至ってい

て、その大半を意識を伴わない知性AIが生産するのであろうか。

- ④ 人間至上主義とデータ至上主義。情報は人が理解することで初めて意味を持つ、人間あつての存在とするのが人間至上主義で、データ至上主義は情報を人間から独立させる。例えばアルゴリズムは人間の外にある意識を持たない客観的存在、知を意識から分離、人間から離陸した存在とするものか。著者の情報の分類「巨視的・微視的・意味的」の第三の意味的分類はこれに関わる。
- ⑤ 労働の区分け。今は食うための合目的労働から労働自体を享受する芸術的労働に分かれる途中、過去労働の集積が物質的モノ化することから非物質の情報に拡大発展する途中。所有物から非所有物への、私的な所有物として労働を支配する資本から無所有の公共財となる分かれ目でもある。
- ⑥ 物質代謝。マルクスは生産とは物質的代謝での活動、と定式化、当時はそれで済んでいた、情報など非物質は商品としては存在せず想定もされていない。今日、情報生産を非物質的代謝とする必要は必ずしもないが、生産イコール物質的代謝と捉えようと、情報など非物質的生産物の分析が不十分になる。
- ⑦ 欧米と日本の型文化の比較。型それ自体は最終的な効用を生み出す生産物ではなく中間的生産物だが情報生産と物質的モノづくりにおいて決定的な役割を持っている、興味深い分析である。物質的モノづくりでは、型は精密精巧な複製生産技術として20世紀産業の中心を担い、特に日本はこの分野で世界を席卷したが、情報生産における型では大いに後れを取った。情報生産において、物質的な型と非物質的な型がある。物質的な型は情報を物質化して運ぶもので、技術としては印刷であり、欧米の活字型に対して日本では版木型による版画である。日本ではコトバの最小単位への分離として

の活字は実現できず、言葉の物質化による拡散での大きな差となった。非物質的な型はデジタル／ネットワークなど技術に適合したワード、パワポ、エクセルなど多様な型がつけられ世界を支配している。日本では俳句の575などの型はあったが、物質的生産力発展を活用する型は生まれなかった。

- ⑧ 藤原学長との対談。マルクス経済学を学んだことがない、とおっしゃるSBI大学院大学の藤原学長との対談は圧巻である。いわば他流試合でありマルクスを前提としない柔軟な姿勢での対談になっていて、あらためて本書の全範囲にわたる議論が分かりやすく、深く展開されている。
- ⑨ 森岡理論における企業社会論。森岡氏は資本主義のネガティブ面に注目し、ネガティブ面の除去を社会改革の一つの目標としていた。それは大切だけれど、問題はこれと社会改革の中心的課題とは必ずしも一致しないことである。例えば本書で改革者として肯定的に紹介されている渋沢栄一は封建制のネガティブ面の除去より、資本主義のプラス面の推進を課題としていた。今日の社会に当てはめれば誰が何を改革すべきか、社会改革の課題とそれを担う主体を見定める目が必要と思う。

2部では著者の高齢化など現実的条件の下での実践的応用として、働学研の運用を中心に肉体的下り坂人生における「学びと生き方のリフォーム」の具体例が述べられている。

- ⑩ 高齢化による自己の能力の「流動能力から蓄積性知性へのシフト」。これは動の能力から積の能力へシフトであり、動は減少しても積は増加する。蓄積された知＝情報は他の知との結合によって掛け算的に新たな知として生産され、掛け算はネットによっ

て巨大化する、情報時代に適合的なシフトである。

- ⑪ 「働きつつ学ぶ」は基礎研のモットーであるが、本書はすでに食うための働きを終えた、働くことの意味が食うためではなく、なっている人々にとっての労働の新たな意味付けを与えるものでもある。読者に社会変革への創造活動へ、社会変革の一翼を担う運動への合流を期待するものである。
- ⑫ 貝原益軒の節度。日々の実生活においてはイエスだが人生トータルではどうか？芸術に節度は要らない。人生を芸術・ロマンと見る著者の生き方は節度重視と節度無視の両面の統一ではないか。
- ⑬ 働学研には報告会と出版／論文づくりがある。報告会では、「巧遅は拙速に如かず、ワイガヤの精神、完成を待たずに公開して多くの目にさらす」をモットーに、論考参加の敷居を下げ、テーマを問わず多くの論考、を優先させている。いずれは量から質へ転化し立派な論文となる、だろうから。一方、出版／論文づくりにおいてはこれとは反対で、妥協せずとことん追求するハードな姿勢。どちらも著者の半世紀の経験から得られたノウハウである。

Ⅳ 読み終わって

評者が強く共感するのは創造的活動をオープンマインドで社会改革に向けていることで、個を信頼する著者の人間的温かみを原動力とした優しさを持つ創造的活動である。一方、率直に言って、1部の難解さと2部で語られる具体的実践との落差が大きい。「情報」は「自由」と並んで欧米由来で、我々日本人には接地した経験が少ない。リフォームで言えば和洋折衷のリフォーム、和洋折衷の情報論を著者には期待したい。

(ひらまつ たみへい 所員)

編集後記

2023年4月から『経済科学通信』の編集実務を担当させていただくことになりました。藍原寛子です。長い歴史と実績を持つ学術雑誌の編集実務ということで、その重責に緊張しつつ、皆様のご指導とご協力により、今号も編集を終えることができました。心より感謝申し上げます。

かつて勤務していた新聞社では原稿を書きながらデスクも担当しておりましたが、独立してからは書き手として出版社、主に週刊誌や月刊誌のデスクと関わってきました。久しぶりの編集作業とはいえ、やはり学術誌の論考は一般記事とは違い、内容も専門的で、論の運び方や構成も大きく異なります。汗をかきかき調べながらの作業が続きました。本数の多いメールでの連絡をはじめ、不慣れな点多々あり、皆様にはご不便、ご迷惑を

おかけいたしました。

さて、執筆者の皆様が精力的に執筆を進めた2024年夏、日本の平均気温は1898年の統計開始以降で最も高く、さらに過去30年の平均値よりも1.76度高かったと報道されました。今号は特集Ⅰが「持続可能な社会とSDGs」、特集Ⅱが「労働組合を含む各種組織を作り大きくするために」と重要なテーマを取り扱っています。実践的体験の中から生まれた論考も多く、激変し、改変・改悪され、また失われようとする環境、経済、労働状況の中、本質的に見失ってはいけない問題が提起されています。各々の論考より、さまざまな視点から議論や思索が深められる第160号となりました。

(藍原 寛子)